古郷に花もあらねどふむ足の
　迹へ心を引くかすみかな　（一茶）

㊀『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・3、「呼子声（鳥）鳴声すれば古郷は迹へ心を引かすみかな」「古郷は花もなけれど行足の迹へ心を引かすみ哉」。

解　古郷柏原には春の花、秋の紅葉と、見るべきものもないのだが、なぜか長途行脚に出立しようとする今日は、離別の思いが強くなって足が前に進まない、の意。その気持を「引くかすみ」に言いかけた。それが虚構であることは前出句と同断。

▼　勝峯『評釈』に、「発句と同一の心境を俳諧歌を以て、情緒的に婉曲な詠出を試みたのである」「この歌には見捨てゝ来た故郷に思ひはない。咲く花があつて、それが惜しまれるのではなし、途中で何も踏みとまつて顧みる理由はない。それなのに、いけないのは故郷の山へ、忘れるなよ、お前の家はこゝだよと言ふ風にたなびく霞である。みちのくへの遠い旅を急がうとするこゝろ、草臥れの出ないうちに行かうとする足を、あの霞がこゝろを旅愁でふさぎ、疲れを足に縺れさせて、行かせまいとし、引返させようとするのである。決心が挫けたのでない。この足が横着なのでない。懐かしい故郷の山から離愁の糸を引く霞に操られて、かくは躊躇する心なのである」。川島『新解』に、「見すてて来た故郷には見るべき花もないのに、自分の心をあとへあとへと引きつける、ということを引く霞に言いかけたのである。花もないどころか、実際は妻、特に愛児というふり切りがたいきずながあったのである」。

あまびらをおどろかさじと青麦に
　ほどよき風の吹すぐるかな　（一茶）

㊀『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・閏4、「あまびらをおどろかすじ（さ）と青麦のなどよくそよぐ夕嵐哉（ほ）」。

注　「あまびら」、『方言雑集』に、「蝶　アマビラ　南部チビラ」とある。

解　青麦の上に舞う蝶、それをおどろかすまいと、ほどよい風がそよいでいる、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「晩春の田園風景である。一望の壟畝（はたけ）は青一色である」「麦ばたけに向つて佇立する一茶の姿が見える。麦の上に何かを捜し出したのである。蝶（蛾）である。穂に縋つて靜かに睡る蝶である。麦は風に靡くかに見えて、蝶の夢をゆり起すに忍びないやうに動かぬ。風もこゝろを配るのか、強い穂搖れに蝶を驚かさないやうに、麦の上つらを軽く撫でゝ柔かに吹過るのである。一茶の主観である」。川島『新解』に、「蝶をおどろかすまいと、青麦の上にちょうどよいかげんの風が吹きすぎていくことよ。の意で、蝶が舞い風の快さを感ずる晩春の情趣である」。

六雪　昼ヨリ雨　午後太足没」、同年閏四月の部には「(十)六晴　大酔昼寝」と記してあり、両者の前後にもそれらしい形跡はない。

一茶は早くから、虚構による行脚、特に『おくのほそ道』行脚を試みようとしていたらしく、『享和句帳』『文化句帳』『七番日記』などに、『おくのほそ道』の歌枕を詠みこんだ句を試作していて、『おらが春』第二話に付した句中にも「松嶋の小隅ハ暮て鳴く雲雀」(『七番日記』文化十五年十一月の部に「松島やかすみは暮て鳴雲雀」、『八番日記』文政二年一月の部に「松島や小すみは暮てなく雲雀」)などがある。「ことしみちのくの方修行せんと」、つまり『おくのほそ道』の足跡をたどることによって、みずからの進むべき方向を見定めようとする、それがたといほのかな憧憬であっても、芭蕉以下の俳諧文学の系譜に連なりたいということになろう。だが、芭蕉が「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。」と言ったのに対し、一茶は以雲の「西行に姿ばかりは似たれども心は雪とすみ染の袖(上白の白注)」によって「影法師ハ西行らしく見えて殊勝なるに、心ハ雪と墨染の袖と思」う、という。また、首にかけた「頭陀袋」を「乞食袋」(コツジキではない)、住みなれた庵ではなく「寝馴れたる庵」を「うしろになして」という。これらは、この文章における「俳諧性」、作者の「野性味」というような言葉だけでは解しがたく、長途行脚を成就した芭蕉に遠く及ばない身であることを記し、それによって、この旅の結末を暗示するという計算があったと考えるのが妥当であろう。

芭蕉は「去年たびより魚類肴味口に払捨、一鉢境涯乞食の身こそたうとけれ」(卓袋宛書簡)と、風狂に徹する覚悟をかため、草庵を捨て無一物となって旅に賭けた。しかるに、この章段では「家〳〵の鶏の時を告ル声も、とつてかへせよとよぶやうに聞へ、畠〳〵の麦に風のそよ吹くも誰ぞまねくごとく覚へて、行道もしきりにすゝまざれば」と、無一物どころか、俗への執着にしばられて、旅を中断するよりほかなかったと記している。

一茶が『おくのほそ道』の旅に早くから憧れていたことは、すでに述べたとおりだが、この章段の文章には、長途の行脚を志すというような緊張感は全く感じられない。虚構の、しかも引き返すことを前提とした、出立であったからだ。

芭蕉の足跡をたずね、そのことによって俳諧文学の系譜に連なりたいという憧憬はどうなってしまったのか。「一鉢の乞食の身こそたうとけれ」どころか、「思ふまじ見まじとすれど我家哉」というのである。自筆稿本で、清書後の推敲の跡は全くない。一茶はこれでよしとしたのである。あたかも聖道門を往くがごとき芭蕉の生きざまと、覚愚・自然法爾の易行門に決定した一茶の生きざまの相違とも言えようが、ここで必要なのは、長年の夢を虚構によって形あらしめ、その終結とした、作者の意図に着目することであろう。

解』に、「独楽坊という前書が暗示する独居の庵のさまで、縁に近く卯の花が咲き満ちていて、その反射光で寝所の様子くらいわかる、灯火がなくとも用が足りるというのである。物にかかわらぬ庵主の無造作で、しかも落着いた生活を思わせる」。

法の山や蛇もうき世を捨衣　（一茶）

㉑『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、「法の世や蛇もそつくり捨衣」「しほらしや蛇も浮世を捨衣」

注　「法の山」、ここでは寺の境内、の意。

解　寺の境内。低木の枝に蛇のぬけがらが掛っている。蛇も教化されて、その妄念を捨てて、解脱をはたしたのだろう、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「蛇が経文の功徳により成仏した説話は、今昔物語などに散見するので、恐ろしい執念の蛇といへども法の山、即ち寺の境内では妄執の浮世を捨てゝ解脱すると見え、帷子のやうなその皮を、樹の枝などに掛けて残して去るといふ一茶の感想と解釈されるのである」。川島『新解』に、「『法の山』の縁で『うき世を捨』すなわち蛇さへも煩悩解脱したのであろうと言いかけ、又、『捨衣』に解脱と脱衣とをかけたのである」。

思ふまじ見まじとすれど我家哉　（一茶）

㉒『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・1、「思ふまじ見まじかすめよおれが家」「もふ見まじ〳〵とすれど我家哉」。

解　思うまい、見まいとするが、どうしても思い切ることができない我が家であるよ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「憖じ家を出る時の安易な諦め方、この閾を再びまたがずとも後悔しないぞ。あの安易な諦め方が、今となつて斯くも出足を渋らせるのでないか。かう叱つて見ても、ぐらつき出したこの心が言ふことを聞いてくれない。よし、かう、二つの瞼をふさいで、胸を壓へて、もう思はないぞ、見ないぞ。そのつぎの刹那には、捨てゝ来た家が浮ぶ。はりさけさうな胸である。いつか瞼はひらいて、あの霞を曳く山裾のどの辺かなのあこがれに、はる〴〵と望まれる我が家の方角である。めん〳〵と尽きない我が家への思慕である」。川島『新解』に、「門出して来た我が家のことを考えまい、そちらの方を見まいとしても、やはり恋しくて我が家のことが思われ、そのあたりを振り返って見ずにはいられない、の意」。

考　『おらが春』第四話の結びの一句。この句の後に、「おなじ心を」と前書して、俳諧歌一首が収めてある。

「ことしみちのくの方修行せんと」「卯花月十六日といふ日、久しく寝馴れたる庵をうしろになして」とある第四話は、鬼貫の「禁足之旅記」にならい、しかも出立間もなく断念するという架空の記事である。『八番日記』文政二年四月の部をみると「（十）

山樵の通ふだけで、旅人も見ない山の中で、朽ち木の洞や岩肌に生れて、百年無変化のそれなりで過していゝ筈なのに、夏が来ればその山苔にも花が咲く。無益な花のいとなみである。山苔はその花ある故に養分の余剰も貯へねばならぬ。水分も取らねばならぬ。迷惑な訳であるが、それが生きるものに課せられた宿命なのだ」。川島『新解』に、「人間界からはもちろん、自然界からも忘れられているような山路の苔にも、気がついて見れば花が咲いている。ヤレヤレめんどうなことだよ、の意で、一茶らしい擬人的表現であるが、瞬時も住するなき自然界の現象と直面して、ふと感慨に打たれることは、誰も経験することであろう。但し、旧作に、『庵の苔花さくすべもしらぬ也　文化九年』とあるので、純粋な感慨と見ようとする気分をこわされる」。

ぢぢ(ぼうふら)の天上したり三ヶの月　(一茶)

⑪『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、上五・中七「ぢぢが天上するぞ」。

注「ぢぢ」、蚊の幼虫。

解　美しい三日月に誘われるように、ボウフラは蚊となって、舞い上がる、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「因果なこのぼうふらが、美しい眉の三日月に誘はれて、人さへ願ひ叶はぬ昇天を許されたのは、真に僥倖でなくて何んであろう。それは蚊になったのだ。天の羽衣の小さい翅を、その因果を哀れむ造化の神から授けられたのである」。川島『新解』に、「中七『天上したり』と、ずばりと言ったところがよい。ぼうふら界を袂別して、三日月をさして飛立っていく蚊の姿は美しい」。

独楽坊

寝所見る程ハ卯花明りかな　(一茶)

⑫『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、「寝所見て(る)程は卯の花月夜哉」。

注「独楽坊」、六川（現、長野県高井郡小布施町の内）の梅松寺住職知洞（天保五没）の別号。

解　灯火もないわびずまいだが、卯の花のほのかな明りで、寝室内の様子くらいはわかる、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「あるじは留守か、さなくば寝入つて起きて来ない趣がある。在庵か、起きてゐれば灯りが見える筈である。真闇である。夏のことなので、雨戸の引残された隙がある。垣根か庭には卯の花が夜目に白く咲いてゐる。雪のやうな花明りで、いつもあるじの寝るところだけは、疑ひなくはつきり窺はれる。出入口には錠が下りてゐるのか、押しても引いても開かない。激しく叩く、揺がす、大声で案内を乞ふ。幾度繰返しても答へがない。卯の花の白さがいよ〳〵冴えて行くのみである」。川島『新

▽『八番日記』文政2・閏4、上五「笋の」。

注　「人の子」、人間、の意。「花咲ん」の「花咲く」は、大成、の意。

解　笋は地上に顔を出すやいなや、「人の子」に食されてしまう。もし、この世に「人の子なくバ」それぞれ大竹に大成することだろう、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「柔かく土の膨れて、痺れるやうに、割れてはしるのは、竹の子が生れる時の大地の陣痛である。猛宗など食用になる竹の子は、この汐時を窺ふ人間に掘出されるのである。竹の子は一に如母草と呼ばれて、俗に『十六日にして母に均し』といふ迅速な発育振りである。たゞさへ花の咲く時期がない上に持つて来て、胴慾な人の子―大人も含めて、に害されて、花咲くすべを知らないのである。かう解されるものゝ、一茶のいふ人の子は、七番日記の『笋の罪作らせに出たりけり』の句で見ると、いたづら盛りのこどもだけをさしてゐるやうでもある」。川島『新解』に、「竹の子は、一茶の言葉を借りれば、この世の明りを見るか見ないに、土から堀りおこされて食われてしまうのである。もし人間ども（人の子は子供だけを指すのではない）がいなかったら、竹の子はどれもこれも若竹となって運命を完うすることができるであろう、の意。花咲くとは、運命の開くことをシンボルする語でもあるが、同時に、竹に花さく幻想でもある。この花は、真竹（まだけ）や淡竹（はちく）などに稀にさく穂のような花とはちがって、美しい仮想花である」。

芝でした休ミ所や夏木立　（一茶）

⑭『八番日記』文政2・6、中七「休所や」。

注　「芝でした」、芝が生えて自然にできた、の意。

解　夏木立が陽光をさえぎり、その下に青々と芝が育って、これはかっこうの休み所だ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「遠望すれば夏山の翠微かと疑ふ。接近すれば人馬の休憩所によい空地もある。小屋掛けではないが、樹影の涼風そよぐ大地に、青い毛氈のやうな芝生があつて、その上を自然の休憩所にあてた茶店があるといふのである」。川島『新解』に、「繁った木立が日除けになっていて、その下が憩うにちょうどよい芝生になっている体である。自然の休憩所の賛美である」。

山苔も花さく世話ハもちこけり　（一茶）

⑮『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、中七以下「花咲世話のありにけり」。『七番日記』文化9・4、「庵の苔花さくすべもしらぬ也」。

解　乾ききって、生気も感じられない山苔だが、時期になれば花もつける、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「筧の落ちる手洗石のあるあたり、日陰の湿つた土のほとり、青い苔に小さい花の咲くのは趣がある。杣か、

らであります」。勝峯『評釈』に、「子持ちの旅商ひ、天秤を擔く行商は男でも辛い。それが女なのだ。櫛でぐる〳〵巻の髪は油気もない。汐風に痛められた肌の荒れ、貧苦に窶れては乳のあがりも早からう。八番日記の『鰯めせ〳〵とや泣子負ながら』には、より悲哀な叫びが聞かれる。その上に麦秋の農繁期では、振売りの鰯イ、鰯イも、留守の家々を通り抜けて、空しい谺となるばかりであらう。田植に雇はれて行く女やもめにも、深い同情を寄せる一茶である。その鰯みんな置て行け、そつくり買つてやる—とでも云ひたからう」。川島『新解』に、「かすりの筒袖に黒い肩あてをして、つまおり笠をかぶった越後女が、子を負うた上に天びん棒をかついで『いわし、いらんかねえ』と、軒毎に声をかけていく。畑、では、天候と取組む農夫たちが汗みずくになって麦を刈りいそいでいたことであろう。息詰まるばかりの生活の実相である」。栗山『鑑賞講座』に、「前書きに『越後女、旅かけて商ひする哀れさを』とあるように、山国の柏原あたりには遠く越後から塩鰯・昆布・わかめなどを持って女たちが行商にやってきたのである。若い女の身空で、重い荷を提げ、おまけに赤子まで背負いながら長い道のりを歩いてくる、そのなりふり構わぬ姿はいたましい」。加藤『秀句』に、「一茶の住む柏原は山間の寒駅だから、新鮮な魚に乏しい。わずかに越後から鰯などを売りにくる。越後の海岸地方からだと、かなりの距離があるので、旅商いのわけだ。一望黄に熟した麦畑の中の埃っぽい越後からの道を、鰯売の女が旅の装いでやってくる。見ると背には赤子が負われている。麦秋の明るい天地にぽつんと投げだされた女の生きる姿、『子を負ひながら』に一茶の深い息が感ぜられるようである」。宮本『大観』に、「柏原へは越後の海岸地方から塩鰯や昆布・わかめなどを売りに行商人が来る。村人たちは今や汗にまみれて麦刈りにいそがしい時である。てんびん棒をかつぐ荷ない商は男でもつらい。それを子を背負いながら、『鰯いらんかねえ』と声をかけて麦秋の村々を売り歩く生活のきびしさに作者は深い同情を寄せているのである」。丸山『秀句選』に、「見渡すかぎり黄に熟した麦畑の中の埃っぽい道を、行商姿をした鰯売りの女がやって来る。重い荷を携えたうえに、背には赤子がくくり付けられている。越後からの長い道のり、子連れの旅商いの苦労を思うと、いたましいことである、という意。生活苦に耐えて生きぬくこの行商女の姿に、一茶の暖かいまなざしが注がれている」。桜井『名句集成』に、「一茶の住ひ柏原は越後との境に近く、水産物は越後から入ってきた。もちろんこの鰯は塩をしたものであるが、それらを売り歩いたのが働き者で知られる越後女なのである。麦秋は、梅雨に入る前の明るい夏の初めのころ。その季節と行商女の哀れさをとりあわせて、そこはかとない情感を出している」。

笋よ人の子なくバ花咲ん　(一茶)

㉑『おらが春』初出。

ばかりの麦なら、枯茎を束ねて、こんな柱でゞもたゝき落せるのであつた」。川島『新解』に、「から竿を使うほどもないわずかの刈麦を、柱にたたきつけてすましたというのである」「『庵の麦きせるで打て仕廻けり　文化十二年』『麦打の打ころばすな草の庵　同』など極端な誇張であるが、『かくれ家』は、この『草の庵』から筋を引いている。右の二句の見える文化十二年初夏は、菊女を迎えてから一年目で、わずかな収穫も物珍しいころであったから、このように調子に乗った句も出来たのであろう」。

越後女、旅かけて商ひする哀さを
麦秋（むぎあき）や子を扉（負）ながらいはし（わ）売　（一茶）

⑭『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、「越後女の哀さを」と前書して「鰯めせ〳〵とや泣子を負ながら」。

解　「越後女」が、妙高高原を越えて信州路まで、魚売りに出かけたかどうか疑問である。もし、そうだとすれば、それは塩鰯でなければならない。漁村において、実際に海へ出て漁をするのは男性の仕事である。そして、浜にあがった魚を籠に入れ、天秤棒でかついで売り歩くのは女性の仕事である。麦秋のころとれる鰯は小さく、生で食べたり、塩辛にしたりするのが普通である。雫の垂れる籠を天秤棒でかついで、足早やに売り歩く、そうしなければ鮮度を保つことができない。また、その距離は浜から十キロ以上にも及ぶのであった。麦秋、高温多湿の気候である。その中を、乳飲み子を負い、荷をかついで売り歩く。生きるためにである。現実直視。それは現実の告発である。「一視同仁」の親鸞教徒の文学と評してよかろう。

▼　川島『新釈』に、「扨麦秋と言へば、旧歴五月の節を挟んだ梅雨近い頃で、やゝ湿りを含んだ土からむん〳〵と熱気の立登るやうな季節である。赤く熟れた麦の中を、飛白の着物に黒い肩当をしてつまをり笠を被つた越後女が、子を負うた上に天秤棒をかついで、それも傷み易い生鰯を荷つて急いで行く姿は、生活苦の喘ぎそのものである。然もこの句から受ける感じは、單に生優しい哀れさではなく、欝勃とした初夏の自然を背景とした人間の惨しい力強さが示されて居る。斯ういふところから詩を摑んで居る作者は、さすがに凡俗の俳諧者流から超脱した地歩を占めて居たと思ふ」。暉峻『名句の鑑賞』に、「一寸歩いてももう汗ばむ梅雨に近い頃、黄色く熟した麦の中を、紺飛白の着物に手甲脚絆、笠をかぶつた越後女が、子供を背負つた上に天秤棒をかつぎ、塩鰯を荷つて行く姿は、恐らく麦秋頃の信濃の景物であつたでせう。がそれ以上に、この句の孕むものは、欝勃たる初夏の天地を背景とする、惨しい人間の生活であります。蕪村などに比べて技巧的に数段劣りながら、しかも芭蕉・蕪村に伍して独自の地歩を占めてゐるのは、かくの如く彼の詩が切実な生命の問題にふれてゐるか

住みなしている心細げな草庵のさまを彷彿させる」。

一ツ蚊のだまつてしくり〳〵かな　（一茶）

⑪『八番日記』文政2・6。

解　羽音も立てずに飛んできた一匹の蚊だが、「しくり〳〵」と刺しはじめたので、ようやくその存在に気づいた、の意。「しくり〳〵」には、蚊に刺された者の実感がある。

▼　勝峯『評釈』に、「ふいに螫されて疼く『しくり』である。再びしくりを重ねて、痒さから痛さへ、意識の閾を穿(ほ)つて、それが一つ蚊の襲来であることを覚知しながら、この句を詠む余裕を一茶はこゝろに貯へ得たのである。黙つてには、耳のそばへ来て鳴いた蚊にくらべて、憎悪の情を露出している」。川島『新解』に、「これは羽音も立てずに、執拗に身辺をはなれぬ一つ蚊に対する憎悪から苛立ちに変っていく過程である。『だまつてしくり〳〵』に、やりきれない実感がある」。

其門(そのかど)に天窓(あたま)用心ころもがえ(へ)　（一茶）

⑫　梅塵本『八番日記』文政2。

注　「門」、ここではくぐり戸の出入口、の意。「天窓用心」、『続猿蓑』中の芭蕉の付句に「あたまうつなと門の書つけ」。

解　綿入れから袷に着替えさせてもらった元気な子供。そんなにはしゃいで、くぐり戸に頭をぶつけるなよ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「袖をまくつて二の腕をたゝき、素袷となつて起居の軽さに、つい、あはてゝ不用意の、あツ、痛いツ、で目から火を出す。一茶はその滑稽さから、天窓用心の四字に関心して、低い出入口の門（かど）に使つて見たのである」。川島『新解』に、「我も人も綿入から袷にかわって身も心も軽く、つい、はずみがついて軽率に行動するので、オットあたま御用心と、低いくぐり戸の出入などに注意する明るい気分である」「しかし、七部集中の『続猿蓑』の歌仙八九間柳の巻の附句に、『あたまうつなと門の書つけ　芭蕉』とある。この句から示唆されたことは疑えぬので、『其門に天窓うつなよ菊畠　文政五年』『天窓用心と張けり更衣　同七年』とあるのを見ても、脱化の過程が察知出来よう」。

かくれ家の柱で麦を打れけり　（一茶）

⑬　梅塵本『八番日記』文政2。上五「隠れ家の」。

▽『七番日記』文化12・4、「庵の麦きせ〔る〕で打て仕廻けり」。

注　「打れけり」、勝峯『評釈』に「『打れけり』は敬語に聞えもするが、『打れたり』の意に取ればよい」。川島『新解』に、「これは敬語でなく『打つたりけり』というような、気負った気持を表していると思うが、いかがであろうか」。

解　わずかばかりの収穫、わが家の麦は竹竿を使うどころか、土間の隅の柱に打ち当てて、その脱穀をすませたのだった、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「打つて穂を落すにはから竿でするが、ちと

注　「戸隠山」、柏原の西方にそびえる高山。戸隠明神を祀る。「居風呂」、風呂桶の下にかまどを作りつけ、湯をわかして入浴する。据風呂。「水風呂」は、一説に「据風呂」の転ともいう。『世間胸算用』に、「過し年は十三日にいそがしく、大晦日に煤はきて、年に一度の水風呂を焼（たか）れした」。『木曽の谷』に、「代官の仮屋に冬の月を見て」（芭蕉）「水風呂桶の輪を入にけり」（同）。

解　さすがは戸隠山のこと、神聖にも感じられる山清水を竹樋で受け、それを直に据風呂へ流し込んでいる、の意。宿坊の実景であろう。

▼　勝峯『評釈』に、「峻嶮な山では巌間の雫、草根の湧き水で、手に掬ぶを以て足れりとするが、戸隠では滴々と垂れ、滾々と沸き、筧に引いて坊中では風呂に落すほどの水量となる」「清水をすぐ風呂に沸かす、それさへ山中では過ぎた風情であるのに、柄杓などで汲むのでなく、滔々と流れ落ちるのだから、瀑のやうな又川のやうな湧水の量である」。川島『新解』に、「山清水を竹樋などに受けて直接風呂桶に流しこんであるのであろう。戸隠は遠近の信仰をあつめている山で、一茶も登拝しているらしいから、宿坊の実景と思われる」。加藤『秀句』に、「山麓の御師の家などの風景であろう。家の裏に戸隠山から湧く清冽な清水があって、それが筧で据風呂に流しこんであるのだ。青い水の色が目に見えてくるような句である」。

此入りハどなたの庵ぞ苔清水　（一茶）

㊶　『おらが春』初出。

▽　『八番日記』文政2・2、「此入は西行庵か苔清水」。同2・5、「おく此（此おく）〔は〕西行庵か苔清水」。

注　「入り」、奥、の意の東国方言。「苔清水」、「幻住庵記」にもみえる伝西行歌「とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなきすまひかな」をふまえる。

解　「とくとくと落ちる苔清水。その奥手に静かに住まう小家、どのような人の住居であろうか、の意。もとより実景ではない。

▼　勝峯『評釈』に、「水が巌に滲み透り、巌が水に錆びをふいた、その上に蘚の花の咲くまで、永い歴史を黙々と滴らす清水である。きらめく雫が自然に美しくたまり、浅くせゝらぎ緩く流るゝのである。これを誘ひ入れて、炊ぎの水に使ふ一庵の構へ、あるじは誰ぞ。桑門（よすてびと）とは言へ、ゆかしく懐しき風流である。どなたは敬語である。このこゝろ遣りを師とせばやの寓意がある。八番日記は「此入は西行庵か苔清水」と、慕はるゝその人をあらはに言はず、かと疑つて、吉野の西行庵となることを表はしてゐる」。川島『新解』に、「八番日記に『此おくは西行庵か苔清水』とあるので、一茶の発想の裏に西行庵のあったことがわかる」「この句も西行の歌から脱化させたものかとも思われるが、方言・俗語の持つ親近感がなまなましい感じを与えて、岩間もる苔清水の奥に

竹であるために『あつぱれ』が利いている」。

花つむや扇をちよいとぼんのくぼ　(一茶)

㊐『八番日記』文政2・閏4、座五「ぼんの凹」。

▽『八番日記』2・2、「ぼのくぼに扇をないと小僧哉」。

注　「花つむ(み)」、夏花摘みのこと。陰暦四月十六日から七月十五日まで、一夏九旬の間、僧徒がもっぱら室内で修行することを夏安居(げあんご)と言い、この間在家でも樒(しきみ)を摘んで仏前に供えた。これを夏花摘みと言う。「ぼんのくぼ」、うしろ首の少しくぼんだ部分を言う。

解　僧徒であろう。夏花摘みに出て、手の扇をちょっと、襟首に挿した。

▼　勝峯『評釈』に、「前出の『小坐頭の天窓にかぶる扇かな』より、ちよいとといふ軽いしぐさで生動的となり、瓢軽な姿に代るが、みづから求めた滑稽ではない」「花摘の句は野の草を分けて、屈んでその花を摘むうなじへ、日が照つて暑いので、扇をぼんのくぼへ、後ろ手にのせる瞬間を『ちよいと』で把握したのである」。川島『新解』に、「夏花つむ手に扇が邪魔なので、ちょっと襟首にさしたのである。こまかい動作をこまかく摑んでいる。『ぼんのくぼ』が焦点で、どこやら動作に滑稽味のある小ぶとりした入道あたまの人物など思い浮べさせる」。

としよりと見るや鳴蚊の耳のそバ　(一茶)

㊐『八番日記』文政2・4、「年寄と見るや鳴蚊も耳の際」。

▽　文政版・嘉永版『発句集』、中七「見てや鳴蚊も」。

解　年寄りと見てであろうか。この蚊は耳のそばに寄ってきて鳴りを立てている。

▼　勝峯『評釈』に、「聾のやうに聞えないのではないが、老人は耳が遠い。せつかくの声を聞き逃す」「一茶は蚊を小憎く思つて、蠅よりぶあしらひに、時には焼打も敢てしたが、この蚊は感心である。遠くの方で今刺しに行くぞと鳴いても聞えまい。そこで耳朶の附け根にきて、それ刺しますぞ。と予報的に先以て囁いて―鳴いてくれるのである。『見るや』は『見てや』よりは主観的である。すつかり年寄と見て、全く年寄りあつかひしての反撥性をふくんでゐる」。川島『新解』に、「『見るや』のやは、軽い疑問のかかった嘆詞である。耳のはた近くブーンと鳴りを立てて来た蚊を、年よりと見て(耳が遠いから)か、と面をふくらませているところに、巧まない童心がある」。

戸隠山

居風呂(すゑ)へ流し込だる清水かな　(一茶)

㊐『八番日記』文政2・5、上五「水風呂」。

く衆生」を凝視し、その真実を具体的に描写するという方法がはっきりとあらわれてくるのである。「なぐさみニわらをうつ也夏の月」「おのが里仕廻てどこへ田うへ笠」「七歳の順礼ぶしや夕時雨」「鰯めせ〳〵とや泣子負ながら」「木がらしや廿四文の遊女小家」「木がらしやから呼されし按摩坊」「重箱の銭四五文や夕時雨」などがそれである。すでに述べたように、こういう傾向は『文化句帳』の時代から見え、『七番日記』には「小盲や身を寒月になして行」「雪ちるや素戻したるアンマ笛」「朝霜やしかも子どものお花売」などと見える。だが、こうした作品の多くは対象との間に距離をおいたものだった。それが『八番日記』の時代に入って、対象の痛みや苦しみをみずからの痛みや苦しみとしてそれを積極的に詠むようになるのである。「おのが里」の句の前書などはその証と見てよかろう。

『七番日記』には、社会の底辺に生きる弱者、それにかかわる見聞がおびただしい数で書き込まれている。それは一茶をとりまく社会的環境の実態である。社会の底辺にうごめくように生きる人間の、生きるための種々相である。その現実を直視することによってこそ、「月花や四十九年のむだ歩き」「花の月のちんぷんかんのうき世哉」（以上、文化8）と、それまでの詩人としての生の軌跡をかえりみることが可能になったのである。『我春集』の序でいう生活実感を重んじた新しい俳諧の主張も、またそこから発したものであった。

時代の最下層に生きる者、その生きざまについて、一茶は眼を覆うことがなかった。だが、その多くは伝聞によるものだった。それは現実的事実から一歩距離をおいての関心であった。『八番日記』の時代に入って、日記中にその三面記事的伝聞の記載は激減し、それに代るように「おのが里」「鰯のせ」「重箱の」など、日常の生活の中で実見した、底辺に生きる者の生きざまを題材とした句が多く見られるようになる。現実的事実を直視して、その真実を詠まんとする姿勢である。

あつぱれの大ワか竹ぞ見ぬうちに　（一茶）

⑪『八番日記』文政2・2、「あつぱれ〔の大〕わか竹〔ぞ〕見ぬうちに」。同2・6、「あつぱれの大若竹ぞ見ぬうちに」。

▽『八番日記』2・5、「少見る内にあつぱれわか竹を」。

解　荀は二、三日目を離しているうちに、もう大若竹に成長したことだ、の意。そのたくましい成長ぶりに「あつぱれ」と賛辞をおくったのである。

▼　勝峯『評釈』に、「育ちも早い、伸びるのも早いのは竹である。殊に猛宗のやうな太い逞しさを胴廻りに、高い凌霄を持前とする若竹は、うつかり見忘れて、親竹すれ〳〵に育つたのを知らない場合がある。あつぱれは褒言葉である」。川島『新解』に、「少し見ない間に立派な若竹となってしまった。全く、親竹をしのぐ若竹の伸び力のたくましさは、目を見張らせるばかりである。わか

出て行く「女やもめ」の姿に一茶の眼は注がれている。前書の「哀さハ」には、時代の最下層にあって、しかも「身一ツすぐす」ためにある「女やもめ」の過酷な生活、その告発の意味が含まれている。

▼　勝峯『評釈』に、「村中の田はみんな植附けが済んだ。惣出で植ゑても、手廻らない家に雇はれて、一人口の後家を立てゝ、食ふに困ることもなかったやうだ。これから何処へ、稼ぎ口をさがしに行くのだ。亭主をなくして了って、再縁もしないで、頑なにあゝしてやもめ暮らしの、みじめさを悔いもしないで、位牌を守るこゝろ掛けこそ感心だが、はたから見れば気の毒な境涯である。一茶の同情はその笠の一字に注がれてゐる」。伊藤『一茶集』に、「寡婦が生活の為に他処の田植に雇はれてゆく憐さ」。川島『新解』に、「自分の村里の田植を終ってから、さて今度はどこへいくのであろうか。山家のこととて適当の産業もないままに、他所の田植にやとわれていく寡婦の身の上をあわれに思いやったのである。『田植』に季感と女の姿を現したところが老練である」。加藤『秀句』に、「自分の田をあまり多く持っていない寡婦などは、人の田植えに雇われていって賃金を貰うのが身過ぎのわざなのだ。自分の村も田植えが終ってもう雇ってくれるところもなくなったので、どこか他村へでかけるのであろう。わが村の人々の田植休みの時に田植笠を被ってでかけてゆくことよと『山家のやもめのあはれさ』を感じとっているのである」。栗山『一茶』に、「貧しい山家の寡婦は、自分の村の田植の手伝いをすませてから、さて今度はどこの村里へ雇われて行くのであろうかとの意。未亡人の生活苦であり、『田植笠』が具象的である」。丸山『秀句選』に、「耕すべき田も持たず、賃仕事に人の農作業に雇われて、ほそぼそと生計を立てている貧しい寡婦であろう。自分の村の田植の手伝いも終って、さて今度はどこの村へ雇われて行くのであろうか、という意」。

考　周知のごとく、一茶に諷刺的・諷刺的傾向と評される作風がある。この傾向は『文化句帳』の時代からはっきりと見えはじめ、『七番日記』の時代を経て『八番日記』の時代に至って著しくなる。「咲からに風に逢けり花の山」「木がらしや地びたに暮るゝ辻諷ひ」「今しがた此世に出し蟬の声」（以上、文化句帳）、「煤はきや火のけも見へぬ見世女郎」「世の中は地獄の上の花見哉」「一本の木に鈴なりの小雀哉」（以上、七番日記）、「陽炎の中にうごめく衆生哉」「雁どもや御用を笠にきてさわぐ」「花見んと致せば下に〳〵哉」（以上、八番日記）。

「世の中は地獄の上の花見哉」と詠む「地獄の上の花見」を個々に直視すれば、「地びたに暮るゝ辻諷ひ」「火のけも見へぬ見世女郎」の姿や境涯が見えてくる。現実から一歩しりぞいて、時代や社会、あるいは世の俗や、それに染った人物を批判・嘲笑するという方法は『八番日記』の時代に入って少しずつ変ってくる。すなわち、「地獄の上の花見」に興ずる人物、俗塵の中に「うごめ

幽栖

虫に迄尺とられけり此はしら　（一茶）

㊀『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、座五「我柱」。同2・6、「あの虫に尺をとらるゝ柱哉」。

注「幽栖」、世をさけて、ひとり静かに住まうこと。「虫」、ここでは「尺取り虫」。鱗翅目シャクガ科の蛾の幼虫。

解　老朽化して、とうとう虫にまで尺をとられるようになった我が家の柱だよ、の意。眼前の老朽化した柱の上に、わが身の老を見る。

▼　勝峯『評釈』に、「好んでみづから嘲けるのではないが、見てくれ。掘立小屋のやうな、鉋もかけない此の見窄らしい柱を。あのぢゝむさく小さく屈んで、それからぐつと逞しく虫の這ふのを」「あんな虫けらが、何に造作もないと云つた風に、柱の丈けを計りにかゝるのを見るにつけて、どんなに世間から見下げられ、さげすまれ侮られてゐるか推察してくれ。一茶の不平は一茶のこゝろに迸ばしるのである」。川島『新解』に、「一屈伸しては棒立ちとなり、一屈伸しては棒立ちとなり、何の目的とも知られず克明に尺をとっていく虫のすがたをジッと眺めている人の姿を思いやると、微笑を含んだ寂しさを感じさせられる。しかし、虫にまで馬鹿にされて、あるいは、虫にまで尺をとられるほどの柱、すなわち茅屋であると考えざるを得ない自意識過剰は、到底幽栖の人たるべきでなかろう」。加藤『秀句』に、「『幽栖』というのはひっそりとしたわび栖という気持で、そのシンボルのような一本の古びた柱が目に立っているのである。かつて亡き父がもたれ、自分が倚り、子供の遊び相手になった傷だらけになってきた『この柱』なのだ。今、尺とり虫が伸びたり縮んだりしてのぼってゆく。人の相手ばかりでなく、今日は尺とり虫にまで尺をとられているのだというのである。『尺をとる』というところには、言外に寸法をはかられる、軽重を問われるというこころがある。虫にまで寸法をはかられる柱は自分の分身なのだ。心ひそかに自分をかえりみて自嘲しているのだ」。

身一ツすぐす迚、山家のやもめの哀さに
おのが里仕廻てどこへ田植笠　（一茶）

㊀『八番日記』文政2・2。前書「身一つすぐすとて女やもめ〔の〕哀〔さ〕は」。座五「田うへ笠」。同2・5に重出。

解　「おのが里」、すなわち自分が住んでいる村里、その田植の時期、近隣の農家に雇われて、早乙女仕事に出ていた。水田の田植なら水の関係でその仕事は二、三日がせいぜい、もちろん自身の耕作する水田はない。「女やもめ」は、これから田植が行なわれる地域にまた雇われて行く。菅笠を頭に、いそいそと「おのが里」を

世がよくバも一ツ泊(止)れ飯の蠅　(一茶)

㊐『八番日記』文政2・4。中七「も一ツ留れ」。

注　「世がよくば」、米価が下落すること。転じて、ここでは豊作の意。勝峯『評釈』に、「世がよいとは米価の下落した意味である。一茶以後になるが、老中田沼山城守を佐野善右衛門が刺し殺して、遽に米価が下落したので、浅草徳本寺の佐野の墓は、世直し大明神と崇められて、参詣人の雑閙した話を蜘蛛の糸巻に掲げてある」。

解　豊作のおかげで米価もさがった。蠅どもよ、遠慮せずに集って来い飯椀の上に、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「飯の蠅は追つても払つても、執拗にたかつて来てうるさい。その蠅に向つて一茶は相談するのだ。折角だがこの飯はお前にやれない。米一舛が何百文すると思ふ。一粒だつて疎末にされないのだ。今に米が下つて世がよくなつたらば、お前とそれからお前の伴なり、もう一ぴき、食べにやつてくるがいゝ。さうなつたら飯は惜しまない」。川島『新解』に、「この『よくば』を、よくなったらばという解釈もあるが、そうではあるまい。この軽い調子は『ソウかい、お前たちは豊年なのかい、そんなら、も一つ来てとまりナ』と、手をおいて飯の上の蠅を見やっているような屈託のない不精たらしい様子が眼前する」。

卯の花に一人きりの社かな　(一茶)

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、中七以下「一人切の鳥井(居)哉」。

解　濃い緑の葉陰に白い卯の花。それに相対するようにひとり座す小さな社の留守居。その境涯・心境が濃い緑の中にひっそりと咲く卯の花によって象徴的に表現されている。本所五ツ目大島愛宕山別当と自称して、住みついていた（享和三～翌文化一）ころの回想か。

▼　勝峯『評釈』に、「疎末な鳥居、祠堂風のやしろ、玉垣のない周囲は卯木の群落で、初夏に咲く小白花に枝を覆はれて、雪明りのやうな光線を萃めてゐる。田舎のそんな祠堂は、おんあだらうんけん（阿鼻羅吽欠）で祈りも呪ひも、引受ける別当が自炊したものだ」「時代背景をそこに措けば、本所五ツ目の愛宕山で四十代の一茶が、その『一人きり』の別当を経験した貧苦の影をこの句も写してゐる」。川島『新解』に、「真ツしろな卯の花ばかりしんしんと咲き満ちている荒れた小さな社！『一人きり』に、そうした寂しい光景を連想させられる」「あたりに人なき社のさびしさが、卯の花のつめたい白さによって、一層深められていく感じである」。

に働いたり、稼いだことはないが、饉えずこゞえず、今、この昼日中に蚊帳を吊つて昼寝をしてゐながら、一向天罰のあたる不安を覚えない。これから先に、どんな罰あたりで苦労するかしらないが、今まではいゝ按排に厄難に逢はなかつた。やれ、勿体ない」。川島『新解』に、「十三年に亘る闘争の果てに異母弟と折半し得た田畑山林であったが、一茶はそこから小作米をあげていたので、自ら農耕の労をとったのではなかった。主我的な一茶は、そのことについて自責は感じていなかったらしいが、さすがに、彼の中に流れている農民の血は、平気ではいられなかったらしく、『田の人よ御免候らへ昼寝蚊屋　文政三年』『田の人を心でおがむ昼寝かな　同』などと言訳めいた句をのこしている。この素朴な農民感情は、江戸流寓時代にも『耕さぬ罪もいくばく年の暮　文化二年』『春がすみ鍬とらぬ身のもつたいな　同三年』など、時々反省のかたちをとっている」。

蚊がちらりほらり是から老が世ぞ　（一茶）

㊀『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、上五「蚊もちらり」。『七番日記』文化13・4「老が世ぞもう蚊一つ鳴そむる」。

解　ブーンという蚊の鳴く声。こっちでも。朝夕の気温も安定して老の身にも過しやすい季節になったぞ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「柏原へ戻つて『是がまあついの栖か雪五尺』の述懐は、あれから年々口にこそ出さね。心の繰言となつて、冬は思ひ出しても、ぞつと身震ひがして厭だ、厭だ。早く夏になつてくれ。夏よ、来い、おや、来たぞ。蚊だな。あれ、逃げて行く。又ぶうんと唸つて、うるさいな。足腰をうゝんと伸ばして、屈託なく寝起きのされるのはこれからだ。これからが老人の世界である」。川島『新解』に、「いかにも楽しそうである。厭わしいものとしか考えられない蚊が、無くてはならぬ夏の景物のように思われてくる。『夕空や蚊が鳴出してうつくしき　文化八年』と、蚊を賛美している一茶でもある。事実、一年の大半を雪に埋もれていて、余処国は花盛りになっても炬燵からはなれられない柏原では、老人がほんとうに手足を伸し得るのは初夏になってからであろう。『是から』に楽しい期待がかけられている」。加藤『秀句』に、「雪国信濃は、雪が解けるともう蚊が騒ぎだす。『老』を労農を観察したものとみて、早春の野良仕事が一段落してほっとして小閑を得たとき、これから自分の手足を伸ばしていられる老人の自由の時だという気持ととれないこともない。しかし、私にはどうもこれは一茶自身の気持のような気がする。蚊がちらりほらり耳につきはじめると、何かたよりなくものうい感じをとどめることができない。これからは自分にもいよいよこのたよりなく物うい老人の世界がやってくるのだというのである。老いを意識させられる先触れとして蚊のたよりなげな羽音を聞いている鋭い感じととりたいのである」。

に、或はその瓜を一心に抱へたまゝ、それなり静かにおとなしいので覗くと、他愛もなく寝入つてゐた写実である」。川島『新解』に、「この子はまだ幼くて、食べられるものという意識がはっきりせず、ただよろこんで、その初真桑を相手に遊んでいるうちに、いつしか、しっかり抱きこんだまま眠ってしまったのであろう。ごろッとした真桑瓜と対照的な、健康で野性的な子の寝顔、『引とらまへて』という俗語に、その子の生活環境もうかがえる」。

人形町

人形に茶をはこばせて門涼ミ　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・2、座五「門涼み」。同2・5重出。

▽『七番日記』文化15・9、「人形に餅を売らせて夕涼」。

注　前書「人形町」、江戸日本橋の町名。人形師が多く住んでいた。「人形」、当時評判だったからくり仕掛けの人形。勝峯『評釈』に、西沢笛畝の説として、「寛政の頃『茶運び人形』と呼ばれて評判を取つた絡（からくり）人形である。角前髪の小姓風を装ひ、かしら（頭―首）と手足は木彫に胡粉で彩色し、美しい振袖袴のうしろに麻糸即ちからくり糸をつなぐ横木があり、その糸が足の下の歯車に通じて、糸の撚りが戻るのをぜんまい（螺旋）として歯車が廻り、自動的に歩行する仕掛けである。高さは一尺ばかり、手に天目茶椀を持つてゐるから其の名がある」。

解　夕涼みがてら、茶店の店頭に腰をおろし、からくり人形が運ぶ茶を楽しんでいるよ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「店先で人形が歩いてゐる。それさへ吃驚させられるのに、お茶を淹（い）れた天目を、上り框にでも涼む人の前へ運んでくる。通りすがりにふと眺めてつくづく感心して、しばらく見惚れる。気がつけばこゝは人形町である。店の看板に嘘はない。あゝさすがは江戸である」。川島『新解』に、「人形町は昔も今も繁華な町である。その中のある家の店先きに評判の人形がかざってあって、あたりの人気をあつめている。無心の人形はからくり仕掛けのまま天目茶椀をさゝげて客をもてなし顔である」。『はこばせて』がこの句の働きで、人形に息が通っている」。

今迄は罰もあたらず昼寝蚊屋　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、「今迄は罪（罰）もあたらぬ昼寝哉」。真蹟（文政3）に、中七以下「罰もあたらず花の雨」。

解　昼寝蚊帳を張って午睡を取る。よくもまあ、今まで罰もあたらずに来られたものだよ、の意。『文政九・十年句帳写』に、「耕（たがやさ）ずして喰ひ、織（おら）ずして着る体たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎ也」と前書して、「花の影（陰）寝まじ未来が恐しき」（文政10・閏6）。耕さずして食う百姓弥太郎自責の念であろう。

▼　勝峯『評釈』に、「江戸落ちをして、柏原へ戻ってからも人並

ある」。「江戸の不角が享保十五年五月、木曽の桟に至つて、同行の寿角が『桟よ足の下タ成る沓手鳥』と詠み、不角は挿絵入りで、その紀行、木曽の麻衣にその句を掲げてゐる」。川島『新解』に、「谷に架した藤蔓の橋とすれば、我が身の重さでいらいらして、通いなれた杣でもなければ立って歩けそうもない。そのかけはしを這いわたっている刹那に、ほととぎすが橋の下から鳴いた、つまり時鳥が橋の下を通りぬけたのである」。「時鳥が通りぬけたと言えば、渓谷の深さ、橋の高さも思いやられる」。

はつ瓜を引とらまへて寝た子哉　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・2、上五・中七「初瓜を引とらまいて」。

注　「はつ瓜」、その年はじめて収穫した真桑瓜。

解　あといく日したら、と言い聞かされていた子供が、「それ、はつ瓜だぞ」と、泥のついたままの瓜を手渡された。この子は、しばらくそれをだきかかえ、ほおずりをして、家中はしゃぎまわっていたが、いつしか、それをだきかかえたまま眠り込んでしまった。泥のついたままの「はつ瓜」を、小さな胸にしっかりとだきかかえて眠っている子の様子は「引とらまへて」によって、あますところなく表現されている。この句、従来はその野性味のみを強調して解されてきたが、一茶がそこに美しいものとして見たのは、「はつ瓜を引とらまへて寝た子」、その姿・表情のみではなかった。そこに、人間本来のあるべき姿を見出し、ほっとしているのである。一茶の時代や社会に対する批判、ないし告発は、こうした人間観の上に成り立っている。そう解するに当たって、「はつ瓜を引とらまへて寝た子」、それがさと女であるかどうかの詮索は無用となろう。

▼　川島『新釈』に、「『引とらまへて』といふ一つ踏ん張つた力強い言葉を持つて来て、瓜を抱えて寝た子の姿態、健康な子供の紅い頬ぺたまで彷彿させる。初瓜―初真桑瓜であらう―をよろこんで、さんざ弄んだ結果その瓜を抱えて寝て了つたと言へば、その子の背景をなす生活状態も略々見当がつく。『引とらまへて』は、同時に、子供の境遇を語つて居る語でもある。斯ういふところに方言或は俗言の抜きさしならぬ用途がある。いつも細心な洗煉の結果とは言へ、用語の選択については、作者は確かに恵まれた天分を持つて居る。この点では一茶を天才と呼んでいゝと思ふ」。暉峻『名句の鑑賞』に、「『引とらまへて』といふ調子の強さは、いふまでもなく初瓜に対する子供の新鮮な歓喜によつて導かれてゐるのです。歓声をあげて初瓜を引とらまへ、しばらくおもちやにしていたけれども、何時の間にか抱きついたまますやすやと軽い寝息を立ててゐる、あどけない子供の歓びであり、姿態であります」。勝峯『評釈』に、「あのさと女のやうな幼な児に、その初瓜をあてがへば、悦んで這つて行き、摑まへようとすると、小さい手を辷つて転げ廻る。喜びながら笑ひながら、転げる瓜を追つて漸く摑まへたのである。その時は這ひ疲れたと思えて、瓜を枕

『おらが春』所収句全注解 (三)

黄色瑞華

凡例

一 本稿は、『おらが春』所収句（一茶二三一、他三二）の全注解である。

一 一行めに、『おらが春』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に（ ）を入れて注した。

一 二行め以下に㊀として、初出及び他書に所収の有無を注した。

一 句形等に『おらが春』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。

一 語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめ、特に必要な場合は「考」として別に記した。

一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。

一 注釈史上主要な注は▼以下に記した。ただし、その著者及び署名は、初出においてフルネームで記し、以下は「川島『新釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

〈承前〉

谷藤橋（たにの）

這（はひ）ワたる橋の下よりほとゝぎす　（一茶）

㊀『七番日記』文化14・9。「這渡る橋の下より時鳥」。『八番日記』文政2・2、「桟」と前書して「這渡る橋の下より時鳥」。同2・閏4にも「桟」と前書して、「這渡る橋の下ヨリほとゝぎす」。

解　ゆれ動く藤蔓の橋を、こわごわ四つん這いになって渡っている。突然谷底から「テッペンカケタカ・ホッチョンカケタカ」と聞こえる時鳥の声が耳に入った、の意。息を止め全身緊張の吊橋を渡る男の心境と時鳥の「テッペンカケタカ」と聞える鳴き声を対比した。『木曽の麻衣』に「桟よ足の下タ成る沓手鳥」（寿角）。

▼　勝峯『評釈』に、「藤蔓を括つた吊り橋だから、その上を踏むと重みで揺れるはずである。歩く拍子にその動揺が波及して、激しくぶらんこのやうに動く。臆病者でなくても橋の上で四ん這ひになりさうに思ふ。一茶も歩き掛けて半途で兵児垂れたのであらう、犬のやうに這つた。その時、鋭い一ト声が橋の下で叫ぶ、時鳥である。橋の高さは時鳥が鳴きながら通り抜けるほどだから、下を覗けば眩暈（めまい）する険しさを持つてゐる。這ひ渡つて蹇（いざり）ではなかったのにと苦笑しつゝ、あの時鳥の一ト声が懐かしまれるので